

其方は人多と申は、何を以て左様には申ぞと、御尋有ければ、彦右衛門被申上けるは、今度會津表江被遊御發向候御留守に於て、只今の通世上無事にさへ有之候は、私五左衛門兩人にて御留守の御用は相足可申候、若又御下向の御跡に於て、世の變も出來、當城を敵方より攻圍み申と有之に至候ては、近國に後詰加勢を請申べき御味方とても無御座候得ば、たとへ只今の御人數の上に、五倍七倍の御人數を殘し置れ候ても、此御城を堅固に相守申儀の可罷成儀にては無御座候、然れば御入用の御人數を、當城江被相殘とあるは、御不益の様に私儀は奉存と被申上ければ、其以後は兎角の仰も無御座、略中長座ゆへ、立兼候を被遊御覽、御兒小姓衆を被爲召、彦右衛門が手を引と被仰付候とや、其節御納戸役の衆御前へ被出候得ば、御袖にて御涙を御拭遊され被成御座候故暫ク指扣其後被罷出候とや、

〔東遷基業 十三〕大聖寺城陷附大谷吉隆計策の事

山中の湯本に、角屋六郎右衛門といふ者有彼も此とき大聖寺籠城時、ゑらみ出されて、主從三人、城に籠る、既に落城に及びし時、六郎右衛門下人權介といふもの、主人に向て、今は籠城叶ひがたし、討死の御覺悟有哉と問に依て、六郎右衛門がいはいく、さればよ恩も昵もなき、此殿の爲に、御家中の面々と、枕を並べて死するも、過たるやうなれども、敵城内へ乗込たれば、のがるべき便りなし、此上は思ふ敵に逢て、討死する外は有まじといへば、權介が曰、あれ御覽候へ、首をとりたる寄手の兵、皆城外へ出ると見へたり、然ば某が首を切給ひ、高名したる寄手にまぎれ、城中を御出有べしといふを、六郎右衛門更に同心せず、たとひさかしき謀にもせよ、罪なき下人の首をきりて、死をのがる、道やあるべき、よしなき事をいわんより、汝等が身を全ふする、才覺せよといふうち、權介小刀をぬひて、咽をかき切、二言ともいわず死ければ、六郎右衛門今は力なく、權介が遺言に隨ひ、城中を出て見るべしとて、權介が首を切て、たぶさを提、一人の下部を引具して、追手金ケ